

現代日本人の神仏観

木村文輝

一、「無宗教」のもう一つの根拠

あなたは何か宗教を信じていますか。このように尋ねられた時、「私は特に宗教を信じていない」とか、「私は無宗教だ」と答える日本人は少なくない。けれども、そのように答える人の中で、本当に宗教的な事柄に無関心な人や、宗教的な考え方を忌避している人は少ないだろう。むしろ、「無宗教」という言葉によって否定されている「宗教」の意味自体が、かなりかたよったものであること、また、現代の日本語の中で用いられている「宗教」という言葉が、既に特定の意味を帯びたものとして使用されていることを、私は別稿において確認した。^①

現代日本人の神仏観（木村）

しかし、それとは別に、「無宗教だ」と語る人が、実際には極めて宗教的な生活を送っていることは、彼ら自身がいざしば「無宗教」の根拠として挙げる次の言葉からも窺われる。すなわち、「私は神社とお寺を同じように訪れて、神と仏に同じように手を合わせている。だから、宗教のことを真面目に考えているとは言いがたい。」このような表現からは、宗教的な事柄に関わりながらも、それが複数の宗教にまたがっているが故に、自らの態度を宗教に対して不真面目だと考え、それを「無宗教」と称している人々の意識が窺われる。

ところが、そのように語る人々も、初詣客でにぎわう神社やお寺では、大勢の参拝者にもみくちやにされながら熱

心に祈りを捧げている。また、有名な神社やお寺では、多くの人々がお札やお守りを買って求めている。つまり、人々は自らの告白とは裏腹に、決していい加減な気持ちで神や仏に手を合わせているわけではないのである。

では、なぜ現代の多くの日本人は、神と仏を区別することなく、同じように手を合わせているのだろうか。この問題を考えるために、本稿では四つの観点から検討を加えることにしたい。一つ目は、神と仏が常に共存してきたわが国独特の宗教の歴史であり、二つ目は、それによって培われた現代日本人の神仏に対するイメージの検証である。そして、三つ目と四つ目は、それぞれ神と仏に対して人々が期待している具体的な役割の確認である。

ただし、この三つ目と四つ目の課題に対しては、同じ方法で検討することはできない。と言うのも、後に詳しく論じるように、わが国において一般に神が仏から独立した存在として語られるようになるのは、明治時代以後のことである。しかも、仏教の影響下で構築された中世以来の神道理論を除いて、今日一般に語られている「神道」の教義は、江戸時代後半以後の国学者が創作したものにすぎない。

加えて、それらは記紀神話にもとづくものであり、民衆が日常生活の中で行ってきた「神さま」への信仰とは必ずしも結びついていない。それ故、神に対する現代日本人の信仰を理解しようとする際には、歴史的、教義的な事柄よりも、むしろ民俗的な事柄に注目しなければならないのである。

一方、仏に対する信仰は、わが国への仏教伝来以来、常に教義的な裏付けを伴うものであった。しかも、時代とともに仏に関する新しい思想が生じて、それは古い思想との整合性を保ちながら後世に伝えられてきた。それ故、仏に対する信仰は、様々な時代の思想が重なりあう形で形成されている。したがって、たとえ現代日本人の仏教観を理解するためであっても、私達は古代以来のわが国の仏教の歴史をたどる必要があるのである。

ともあれ、本稿においては上記の四つの観点から、現代日本人の信仰心を読み解くことにしたい。それによって、一見すると神と仏に対して区別することなく手を合わせているのかのように見える現代の日本人が、実際には一つの秩序のもとに神仏を信仰している姿が明らかになるであろう。

二、神仏習合と神仏分離

まず始めに、わが国における神と仏の共存、いわゆる「神仏習合」の歴史を振り返ってみよう。

六世紀の前半、仏教がわが国に伝えられた時、仏は「蕃神（隣の国の神）」として受け入れられた。その後、仏教に対する人々の理解が深まると、神々は他の衆生と同様に輪廻の苦しみを経験する存在とみなされるようになり、衆生の救済を目指す仏には、そうした神々をも救う役割を期待された。一方、神々は仏を守護する存在となり、神と仏は相互に支え合う関係を結ぶことになった。さらに、平安時代になると本地垂迹説が登場し、神と仏の一体化は論理的な裏付けを与えられるようになった。すなわち、天竺に住む仏（本地）は、わが国の人々を救うために、あえて神という仮の姿（垂迹）で現れるという主張である。その結果、寺院のみならず、神社も神として仮現した仏の住む場所とみなされることになり、神社の中に仏が祀られることになった。やがて中世においては、さらびやかな神社の社殿は、人々が死後に訪れるべき極楽浄土を模したものと考

えられるようになった。その一方で、神社側に立つ人々は、その考え方を逆転させることで、反本地垂迹説を唱えるようになった。つまり、わが国の神こそが主体であり、その神が世界の人々を救うために、あえて仏の姿をとつているという立場である。いずれにせよ、これらの主張は神と仏の一体化を推し進めるものであり、そこに神と仏を区別しようという考えは見られない。

こうした神仏習合のあり方を示す幾つかの実例を挙げてみよう。例えば、江戸時代以前の絵図を見れば、寺院の境内には当然のように鎮守の社が祀られているし、大きな神社にはその神社を管轄する別当寺が設けられていることが窺われる。また、佐藤弘夫氏の指摘によれば、中世に流行した起請文には誓約を保障する存在として、多くの仏と神々の名前が序列に従って記されている^②。さらに、尾崎正善氏によれば、曹洞宗の僧侶達が読経の際に唱える回向文の中で、江戸時代以前には、その寺院の本尊仏のみならず、数多くの神仏の名前が祈願の対象として読み上げられていたという^③。のみならず、古い絵画資料を眺めると、神社に参詣している人の中に柏手を打っている姿が見当た

ないことから、一般の人々にとつては、神社でもお寺でも、手を合わせる作法は同じだったのでないかという指摘も存在する⁽⁴⁾。ここに挙げた例は極めて限られたものではないけれども、神と仏を区別することなく、同じように崇拜していた人々の意識を垣間見ることができであろう。

このような伝統的な宗教意識に対して、大きな変更を加えたのが明治新政府である。江戸時代以来の国学者の主張に従いながら天皇親政を目指した新政府にとつて、天皇の祖先である神々を仏の垂迹とみなすことは受け入れられない主張であった。また、仏教寺院と結び付いていた旧幕府側の影響力を削減するためにも、仏教界に従来どおりの地位を与えることは認められなかった。そのため、新政府は明治元年にいわゆる神仏分離令を發布し、仏教からの神道の独立を促した。その後、各地で吹き荒れた廃仏毀釈の運動は、元来は新政府の方針によるものではなかったけれども、結果的には神道と仏教を区別しようとする新政府の意向を強く民衆に知らしめる作用を果たしたと言えるだろう。また、江戸時代に確立された檀家制度のもとで、寺院住職の高圧的な態度に苦しめられてきた人々の中からは、

寺院の支配から離れるために、神道に改宗する例も発生した。

ただし、新政府が主導する神仏分離の政策は、その時代錯誤的な祭政一致の思想や、国民の道德的教導を神道勢力のみではなし得なかったこと等の理由により、明治五年に挫折した。新政府は、国民の教導のために改めて仏教界の協力を求めるとともに、仏教諸宗派も、新時代に適合した「宗教」としての蘇りを目指して様々な改革に着手した。その際に仏教界は、自らの存立に対する国家権力の承認を得るために、「宗教」から切り離されて国民の義務とされた「神道」、すなわち、雑多な神々への信仰を切り捨てた上で、天皇と皇祖神への崇敬を根幹とする国家体制の下に自らを位置づけることになった。ここに、「神道」と仏教は、江戸時代以前とはまったく違う形ではあるけれども、併存することが当たり前の体制が成立した。やがて軍国主義の時代を迎えると、その流れの延長上で、仏教界も「現人神」としての天皇を中心とする戦時体制を支える役割を期待されるようになるのである。

第二次世界大戦の終結後、信教の自由と政教分離を原則

とする日本国憲法下において、神道各派と仏教諸宗派は他の宗教団体と同様に、それぞれ独立した宗教団体とみなされることになった。つまり、神道と仏教は、この時代になって、わが国の歴史上初めて、同等の立場で別々の「宗教」としての地位を認められたのである。⁵⁾

しかし、それはあくまで政治的、法律的な変更であり、人々の日常生活とは直接関わりのないものである。それ故、人々は従来の習慣に従って、神社とお寺を同じように参拝する姿勢を保ち続けた。つまり、人々が二つの同格の「宗教」を同じように信仰するという状況が、ここに初めて出現したのである。しかも、明治時代以来、知識人層を中心とする「宗教」の理解においては、一神教的な傾向が顕著なものになっていた。その結果、一人の人間が信仰する「宗教」は一つであるべきだという知的理解と、二つの「宗教」を同時に崇拝するという実際の行動とが矛盾するという、新しい状況が生み出されることになったのである。

このように理解すれば、現代の日本人が神社とお寺の両方に同じように手を合わせている現象は、決して人々の宗教に対するいい加減な態度を表しているものではないこと

現代日本人の神仏観（木村）

が明らかである。それどころか、現代の人々は、神仏の共存という千年以上にわたるわが国の宗教伝統にならっているのであり、その両者を別々の「宗教」として位置づけている明治時代以降のわが国の政治的、法律的なあり方と、それに従いながら神仏を無理やりに分離させようとする人々の「知的理解」こそが、日本人の伝統的な心情から乖離したものであると言うことさえもできるのである。

三、無意識的な区別

ところで、現代の日本人は、自分達の自覚のとおり、本当に神と仏を区別していないのであろうか。次にこの問題を考えてみよう。そのためのヒントとして、ここでは二つの事柄に注目したい。一つは、日常生活の中で「神」と「仏」という言葉を比喩的に用いる時の用語法であり、もう一つは、神社とお寺で行われる祭りや儀式に対する一般の人々の捉え方の違いである。

まず始めに、二つの言葉の使い方について考えてみよう。例えば、他の人よりもはるかにサッカーの上手な人を「サッカーの神さま」と表現することがある。あるいは、

手術の特技が大変に優れた外科医のことを「神の手を持つ」と讃えることがある。それ以外にも、特に優れた技術を「神技」と称したり、一つのことに一心不乱に集中している様子を「神がかり的」と呼ぶこともある。これらの表現で使われている「神」という言葉は、通常の人が持ち得ないような特別な「技術」、もしくは「力」の持ち主を表していると言うことができるだろう。そして、そのような形で用いられている「神」という言葉を、「仏」と置き換えることはできない。

一方、大変に優しい人、あるいは慈悲深い人のことを、私達は「仏のような人」と表現する。ここでは、優しき、慈悲深きが「仏」という言葉によって表されている。また、「仏の境地」と言えば、何ごとかを悟り、心穏やかな境地がイメージされるだろう。いずれにせよ、「仏」という言葉によって表されている事柄も、「神」に置き換えることはできないのである。このように、多くの人が「神」と「仏」を区別していないと言いながら、日常的な言葉遣いの中で、その二つを無意識的に使い分けていることが窺われる。

そして、このような区別は、神社とお寺で行われる祭りや儀式に対する人々の捉え方にも表れている。例えば、神社の祭りと言えば、にぎやかで威勢がよいイメージを抱く人が多いのではないだろうか。神輿や山車の巡行ともなれば、多くの人々が「わっしょい、わっしょい」と叫びながら、汗だくになって躍動している。中には、酒を飲んでへべれけになりながら、それでも踊り続けている人もいる。むろん、神社の儀式にも静かで厳かなものは数多く存在するし、社殿に上ってお祓いを受ける時には、厳肅な雰囲気味わうことになるだろう。その場合には、心がリセットされるような、あるいは、新しい生命を吹き込まれるような気持ちになるかもしれない。いずれにせよ、神社における祭りや儀式は、私達の活力や生命力を更新してくれるように感じられるものだと言うことができるであろう。

それに対して、お寺の儀式と言えば、葬儀や年忌法要に代表されるように、静かで穏やかなものというイメージを抱くことが一般的ではないだろうか。あるいは、坐禅のイメージともあいまって、お寺に対しては心が落ち着く場所とか、やすらぎを与える場所という印象を抱いている人も

多いだろう。つまり、表層的なイメージの比較ではあるけれども、多くの人々は無意識のうちに、神社の祭りや儀式は何らかの力を付与してくれるものであり、お寺の儀式は落ち着きや穏やかさを与えてくれるものだというイメージを抱いていると言えるのではないだろうか。

このような神社やお寺に対するイメージと、先に論じた「神」や「仏」という言葉に付随するイメージをもとにして、私達はここで一つの仮説を立てることが出来るかもしれない。すなわち、現代の日本人は、「神」を特別な技術や力の持ち主で、それらを人々に与える存在だとみなしており、他方、「仏」は私達の中にある様々な力やエネルギーを鎮める存在だと捉えているという仮説である。無論、「神」と「仏」の観念を、それだけのイメージの中に押し込めてしまうことは適切ではない。けれども、現代日本人の一般的な感覚として、そのような区分を行うことはできないであろうか。本稿の以下の部分では、神と仏のそれぞれに対して、私達が無意識のうちに抱いている要素を確認することで、この仮説の検証を行うことにしよう。

四、力を与える者としての「神」

(一) 祭りに見られる神の役割

現代の日本において、人々が神との関わりを強く意識するのは祭りの時であろう。そうした祭りの中でも、全国で同じように行われているものと言えば、正月に勝るものはないだろう。もちろん、正月行事に関しては、地域ごとの風習が色濃く残されている。けれども、正月には歳神さまが各家を訪ね歩き、それぞれの家の人々に、一年間を生きるためのエネルギー、すなわち「歳魂」^{としだま}を授けてくれるという考え方は、全国的にほぼ共通したものである。そのような大切な客神を迎えるからこそ、人々は歳末に大掃除を行ったり、お節料理を準備したり、あるいは歳神さまの依り代となる鏡餅を用意して、正月迎えの準備を行うのである。そして、年が明けると、目には見えない歳神さまをもてなすために、家族一同が挨拶を交わし、料理を囲みながら和やかな団らんを交わす。その間に、歳神さまは一人ひとりに対して「歳魂」、すなわち「お年玉」を授けてくれるということが、民俗学の研究によって明らかにされている。

ところが、このようにして歳神さまから一年分のエネルギーを与えられているにもかかわらず、特別な用途のためにさらなるエネルギーが必要になることがある。例えば、米作りを行う人々は、昨年の豊作によってエネルギーを失った田んぼに新たなエネルギーを補充してもらうために、田の神を招いて春祭りを行う。あるいは、予想外の夏の暑さでエネルギーが不足すれば、夏バテを起こすかもしれない。そのような事態を避けるために、神々を招いてエネルギーを分けてもらうための夏祭りが行われる。その他、病氣平癒や合格祈願のために神社にお参りに行く人々は、それぞれの目的に必要な臨時のエネルギーを、相応の神から分けてもらうことを目的としていると言えるだろう。

このように考えると、神は私達が生きていくために必要な様々なエネルギーの供給源だと言うことが可能である。そして、このことは先ほど示した仮説とも一致する。では、現在わが国において信仰されている神々は、それぞれが何らかの力やエネルギーの保持者、もしくははその供給源としての役割を果たしているであろうか。この点を、次に確認してみることにしよう。

（二）神の分類

そもそも、日本における「神」とは何かという問題に対しては、必ずしも容易に解答を出し得るものではない。けれども、現在の日本人が「神」と認め、崇拝の対象とみなしている存在をあえて分類すれば、三つのグループに大別できるように思われる。⁶一つ目は山や川、海や太陽等の「自然神」、二つ目は氏神と称される「祖先神」、そして、三つ目は特別な力を発揮した「人間神」である。

この中の「自然神」は、自然界の様々な存在を「神」として崇めるものであり、いずれも人智を超えた巨大な力の持ち主である。しかも、太陽は人々に光と温かさを与え、大地はすべてのものを支える力を発揮し、山や川は様々な恵みを与えてくれる一方で、それらが通常とは異なる巨大な力を暴発させると、人間にとっては大きな災いをもたらすことになる。太陽が連日照り続ければ水不足となり、大地が鳴動すれば大地震となる。同じように、山崩れや川の氾濫等、いずれも人間の生活を脅かすものばかりである。このように、「自然神」は、人間に対してプラスとマイナスの力を及ぼす存在であるからこそ、人々は「自然神」に

対して、より多くのプラスの力を發揮してくれることを祈る一方で、マイナスの力を發揮しないように祈りを捧げるのである。

二つ目の「祖先神」についても、一人ひとりの人間に対して生物としての生命を与えてくれる存在であることは確かである。それ故、人々は「祖先神」がプラスの力を發揮して、子孫の繁栄をもたらしてくれるように祈るのだが、もしもこの神がその力を發揮しなければ、その家の子孫は断絶することになるだろう。

三つ目の「人間神」は、さらに三つのサブ・グループに分けられる。第一は社会の秩序に甚大な損害を与えた人、第二はそれと反対に、社会の秩序維持のために絶大な貢献をなした人、第三は、それ以外の点で常人が持ち得ないような技術や力を保持した者である。

第一のグループは、「人間神」の中で最も早く成立した存在であり、北野天満宮に祀られた菅原道真や、江戸の神明明神に祀られた平将門等が代表的な例である。彼らは、社会の秩序に挑戦し、その転覆をはかった者として、為政者から恐れられた者達である。ただし、この場合、その者

達が生前に、反権力的な行動を実際に行ったか否かは問題ではない。むしろ、遺恨を抱いてこの世を去ることにより、死後に怨霊となって為政者に復讐を仕掛ける力を持つと考えられたことが重要である。為政者は、この者達を「神」として祀り上げること、社会の秩序を破壊するエネルギーが發揮されないように願ったのである。一方、権力に抑圧されている民衆は、このような「神」に祈りを捧げ、反権力の欲求を空想の中で満たそうとした。彼らは、この「神」の力で日常から逃避することを目指し、それによってカタルシスの貴重な機会を手に入れるのである。

第二のグループの例としては、自らの神格化を目指した織田信長や、豊国大明神として死後に祀られた豊臣秀吉がその嚆矢である。その後、江戸時代に入ると、徳川家康が東照大権現として祀られたのをはじめとして、各藩の藩祖が、それぞれの領地において「神」として祀られた。さらに明治時代になると、南朝方の功臣であった楠木正成が湊川神社に祀られたり、日露戦争で軍功を挙げた乃木希典や東郷平八郎が、それぞれ乃木神社や東郷神社に祀られることになった。こうした人々は、いずれも通常の人では為し

得ないような貢献を、社会に対して行つたと認められた者達である。そして、このグループに属する「神」は、社会の秩序の維持を目指す為政者に対して、それを支える力を供給することを求められたのである。

さて、第三のグループの「神」に近い存在としては、既に平安時代の中頃に信仰が成立していた聖徳太子や空海をはじめとする高僧達が挙げられる。だが、現代人の感覚から見れば、彼らは「神」と言うよりも、むしろ仏の化身とみなす方が妥当である。「仏」とは無関係に、あくまで「神」として祀られた人間ということであれば、やはり江戸時代以降に登場したと考えてよいだろう。その中には、どこからともなくやって来て、その土地の人々が知らない特別な知識や技術を授けた後に、どこへともなく去つて行つた正体不明の漂泊者と、他方では、同一の村落の中で生まれ育ちながら、常人とは異なる力を發揮したという理由で、例えば歯痛の神とかお産の神、あるいは学問の神とか裁縫の神というような形で、民衆の間で祀られた者が含まれている。現代の日本において、「サッカーの神さま」とか「神の手を持つ」外科医という表現の中で用いられて

いる「神」の概念も、この中の後者のグループから派生したものだと言ふことができるであらう。

ともあれ、ここに示した第一から第三のサブ・グループに属する「人間神」は、いずれも通常の人間が持ち得ない力、もしくはエネルギーを保持し、それを發揮した特別な人々である。その意味では、一つ目の「自然神」や二つ目の「祖先神」と同様の性質を有していると言ふことが可能である。

ちなみに、数多くの神々の中には、上に記した三つのグループの中の複数に関わる神も存在する。その一例が、天照大神である。言うまでもなく、この神は太陽を神格化した「自然神」であるとともに、皇室の祖先として「祖先神」の性格も有している。また、先に挙げた歳神さまや田の神も、しばしば同様の性格を持つてることが指摘されている。すなわち、これらの神々は山に住む「自然神」であるとともに、それぞれの一族の「祖先神」であると伝承されている例が報告されているからである。

しかし、上述した三つのグループのすべてに関わる神となると、やはり特殊な事例かもしれない。そのような例と

して挙げられるのが、菅原道真の霊、すなわち天神である。怨霊となった彼は、雷神達を引き連れて宮中に集まる殿上人を襲った。これは「自然神」としての性質を持つとともに、社会の秩序に挑戦した「人間神」としての性質を有している。のみならず、彼は後に学問の神として特殊な力の保持者としての性質も与えられた。加えて、江戸時代になると、彼は加賀前田家において、同家の「祖先神」として祀られることになる。このように、天神は数多くの神々の中でも特殊な地位を占めていると言うことができるのである。

五、力を鎮める者としての「仏」

(一) 自らを鎮める「仏」

神は特別な力の保持者であり、その力やエネルギーを人間に与えてくれる存在と考えられる。それに対して、仏やお寺に対する人々のイメージは、先述のとおり、優しさと慈悲深さの象徴であるとともに、人々の心を鎮め、安らぎを与えてくれる存在と言うことができるだろう。そして、このことは、そもそも「仏」とは何かという問題、つま

り、仏教の出発点にその由縁を求めることが可能である。言うまでもなく、仏教は二千五百年前に、釈尊が悟りを開いたことに始まる。彼はそのために六年に及ぶ苦行を行い、それを放棄した後に、一週間の瞑想を行ったと伝えられている。しかし、これらの修行は一貫して欲望の制御を目指すものであった。と言うのも、そもそも苦行とは、身体を極限状況に追い込むことによって、自らの欲望を制御しようとする行為だからである。だが、極度の苦行は身体を疲弊させ、欲望のみならず、正常な思考力さえも失わせるものだったのでないだろうか。

釈尊は、ついに苦行を捨てると、菩提樹の下で瞑想に入った。その瞑想を続ける中で、彼は自らの内なる悪魔と呼ぶべき様々な欲望と闘っていたと伝えられている。そして、それらの欲望が消滅した瞬間、すなわち、悪魔を降した瞬間に、彼は悟りを開いた。つまり、釈尊が悟りを開いた大きな要因は、何よりも欲望を制御したことにあるのである。しかし、その一方で、釈尊は瞑想を行っている間、様々な欲望と闘っていたという伝承も重要である。なぜなら、彼はその間、正常な思考力とともに、次々と欲望

を生じさせ得る体力を保持していたとすることができらるからである。そうだとすれば、彼は瞑想を続けている間、適度の食事と睡眠をとっていたはずであり、あらゆる欲望を全面的に否定したわけではないことになるだろう。

ここに、釈尊の修行と悟りに関して、重要な事柄が浮かび上がってくる。すなわち、釈尊は欲望の制御を指ししながらも、それはあくまで過剰な欲望の否定であり、すべての欲望の否定ではなかったという点である。この点に、彼が修行の途中で放棄した苦行と、悟りの直接的な手段となった瞑想との決定的な違いがある。瞑想は、徹底した欲望追求と、徹底した禁欲主義のいずれに偏ることもない「中道」の立場だったのである。そして、この「中道」の思想こそが、釈尊の教えの核心であった。彼は、過剰な欲望、過剰なエネルギーのみを鎮め、それを放棄することを説いたのである。それ故、仏教とは極度の禁欲主義を説くものではなく、心を穏やかに鎮め、安らぎを与えてくれる存在だという現代の日本人のイメージは、まさに釈尊の基本的な立場に沿ったものなのである。

（二）他者を鎮める「仏」

釈尊の時代から五百年ほどが経過して、西暦一世紀頃にはインドで大乗仏教が成立した。この大乗仏教の最大の特徴は、自らが苦しみから逃れるのと同様に、他者をそれぞれの苦しみから救うことを目指した点にある。このように、自らと同様に他者に喜びを与え、他者から苦しみを取り除く姿勢を仏教では「慈悲」と呼ぶ。それ故、現代の日本人が、「仏」という言葉に「優しい人」とか「慈悲深い人」というイメージを抱くのは、こうした大乗仏教の思想に由来するものである。

ところで、他者を苦しみから救うためには、他者のもとからその苦しみの原因を取り除かなければならない。言い換えれば、他者の持つ過剰な欲望、過剰なエネルギーを鎮め、それを取り除くことが目標とされることになる。そして、この「他者」という概念を不特定多数の人々、さらには国家や国土にまで拡大した時、そこに仏教が中国や日本において担った「鎮護国家」の思想が成立する。

わが国における「鎮護国家」の思想は、八世紀の半ば、すなわち奈良時代の聖武天皇の頃に確立した。この当時の

人々は、山や川をはじめ、動植物に至るまで、自然界のあらゆる存在には神が宿っており、それぞれの神がその意向を人間に伝えようとする時、通常とは異なる異変を生じさせると考えていた。こうして引き起こされる異変が「祟り」であり、それこそが神の表れと考えられていたのである。そのため、全国の役所では「祟り」の監視を続けており、それが発生すると、そこに込められた神意を探る占いが行われた。そして、それが国家にとつての凶兆である場合、神を鎮めるために鎮護国家の祈禱が行われた。

また、その同じ頃、各地の代表的な神々が、神であるが故に負わざるを得ない罪業と苦しみから逃れるために、仏に帰依するという託宣を行い、それによって神のための寺院、すなわち神宮寺が建立されるようになる。⁽⁸⁾ 仏の力によって神の罪業を鎮め、飢饉や疫病、あるいは異常気象等の発生を抑えることが願われたのである。

ちなみに、この時代に信奉されていた神々は、基本的には自然界に宿る「自然神」である。それ故、この神々が正常な力を発揮しない限り、人々の生活は成り立たない。けれども、こうした神々が通常とは異なる過剰な力を暴発さ

せた時、人々は多大な災難を被ることになる。そのため、仏は神々の発する過剰な力を鎮める働きを期待されていたのであり、それを支えたのは、呪術的な要素を多分に含む、「雑密」と呼ばれる初期密教の思想であった。

ところが、奈良時代の末から平安時代の初めにかけて、新しい「神」の概念が加わった。それは、権力闘争に敗れて非業の死を遂げた者が、怨みを晴らすために死後に復活した「怨霊」、もしくは「御霊」と呼ばれた存在であり、従来の「自然神」とは異なる「人間神」の登場であった。

八世紀の末に亡くなった早良親王以来、平安時代の前半には多くの御霊が誕生し、朝廷を悩ませることになる。これらの御霊は、当初は自らを陥れた特定の人物を攻撃するのみであったが、やがて、飢饉や疫病をはやらせることによって、国家や民衆に苦しみを与えるようになった。そうした御霊の「祟り」を鎮めるために、新たに注目されたのが当時の最先端の仏教であった「純密」、すなわち教義的な体系化を果たした密教である。密教は、世界全体を大日如来の表れとみなし、その大日如来との合一、すなわち即身成仏を果たした行者にこそ、御霊を鎮める力があると主

張した。こうして、平安時代から源平の争いを経て、鎌倉時代に至るまで、密教によって御霊を鎮めることが鎮護国家の思想の中心となった。⁽⁹⁾

しかし、鎌倉時代の後半になると、その担い手は密教の行者から、新たに中国から伝えられた禅宗の僧侶に移っていった。その背景には、坐禅を通して世界の真理を体得することを目指す禅宗の教えが、世界そのものである大日如来との合一を目指す密教の思想と軌を一にしており、⁽¹⁰⁾ 禅宗僧侶の多くが、密教儀礼を取り入れていたことが指摘される。その上、広大な莊園を背景に世俗権力と化した密教の僧侶よりも、戒律を順守し、坐禅に励む禅宗の僧侶にこそ、神秘的な力の保持を認めようとした人々の思いがあった。

やがて室町時代になると、鎮められるべき死者は権力闘争に敗れた特定の人物のみならず、戦場で犠牲になった無数の兵士達をも含むようになった。そのため、足利幕府はそうした犠牲者の鎮魂のために、全国に安国寺と利生塔の設置を命じた。また、大規模な戦乱や飢饉の際には、その犠牲者を弔うために、禅宗僧侶を招いて施餓鬼会を行うよ

うになった。⁽¹¹⁾ 同時に、このような禅宗僧侶の力を期待して、各地で人々を苦しめる悪霊の鎮撫が行われるようになった。それがきっかけとなって、全国に禅宗寺院が設立されたのである。

その後、江戸時代に入ると、幕府の政策による檀家制度の確立ともあいまって、仏教にもとづく鎮魂儀礼が、一人ひとりの民衆にまで行われることになった。その結果、いわゆる「葬式仏教」と呼ばれる状況が生み出されることになったのである。

このように見ていくと、日本における仏教の歴史は、「神」の概念の変遷、もしくは「崇り」の変遷と密接に結び付いていることが窺われる。すなわち、仏に期待される役割は、当初は「自然神」の過剰な力を鎮めることであり、それが後に「人間神」にまで適用され、さらには「神」と称されることのない個別の死者の鎮魂にまで拡大されたのである。つまり、わが国において仏に期待された役割の一つは、一貫して過剰な力、もしくはエネルギーを鎮めることにあったと言っても過言ではない。

ちなみに、明治新政府は戊辰戦争における官軍の犠牲者

を、招魂社、後の靖国神社に「神」として祀った。しかし、これは従来のが国の宗教観においては、明らかに仏教が果たしてきた役割である。少なくとも、戦没した一人ひとりの兵士の中に、先に示した三種類の「神」が保持していたような特別な力を見出すことはできない。あえて言えば、そこに祀られている者達は、佐藤弘夫氏が指摘しているように、「現人神」たる「天皇のために落命したがゆえに、神として祀られる」にすぎない。つまり、靖国神社に祀られている「神」は、祭政一致を目指して神仏分離を遂行した新政府が意図的に創造した概念であり、わが国の神と仏の伝統には、必ずしもそぐわない存在ということになるのである。

六、アクセルの「神」、ブレイキの「仏」

さて、これまで論じてきた事柄を、簡単にまとめてみよう。まず第一に、わが国の歴史の中で、神と仏は共存することこそが伝統的なあり方であった。その両者を独立した異なる「宗教」とみなす考え方が公に認められたのは明治時代のことであり、それが広く認知されるようになるのは

現代日本人の神仏観（木村）

第二次世界大戦以後のことである。しかも、その頃から人々は、複数の異なる「宗教」を同時に信仰することは不自然であるという考え方を抱くようになった。そのために、わが国の伝統的な作法にもとづいて、神と仏に同じように手を合わせる自らの姿を、人々は肯定的に受け入れることができなくなつたのである。

だが、その一方で、現代の日本人は言葉の使用法からも、あるいは儀式に対するイメージの点からも、神と仏を無意識のうちに区別していることが窺われた。すなわち、神は特別な力やエネルギーの保持者であり、それを人々に分け与える者であるのに対して、仏は慈悲深い存在、もしくは人々に対して落ち着きと安らぎを与える存在というイメージである。

そして、このような区別は、神と仏に対する実際の信仰の中に、その根拠を見出すことが可能である。まず、神は「自然神」、「祖先神」、「人間神」という三つの範疇に大別することが可能であり、そのいずれに属する「神」であっても、特別な力、もしくはエネルギーの保持者であることは共通していた。さらに、それらの「神」は、自らの保持

する特別な力を適切な形で發揮したり、適切なやり方で人々に分け与える場合には人々に幸せをもたらしてくれらる。しかし、そうした力やエネルギーを暴発させる時には大きな災難を与えることになる。

それに対して、仏は常に過剰な力やエネルギーを鎮める役割を担っている。それは、自らの内に宿る欲望の場合もあれば、他者の中に潜む力やエネルギーの場合もある。わが国において、この仏が鎮めるべき「他者」を、当初は自然界に宿る神々とみなしていた。ところが、それは後に怨霊と化した特定の間にも拡大され、さらにはあらゆる死者の靈魂にまで適用された。こうして、仏教が死者儀礼を独占的に扱う風習が確立したのである。

このように理解すれば、現代の多くの日本人が、子供が生まれた時には神社に初宮参りに出かけ、人が亡くなった時にはお寺で仏教式の葬儀を挙げるといふ慣習を、合理的に理解することが可能であろう。すなわち、生まれたばかりの子供には、神から多くのエネルギーを分け与えられることを期待する。その一方で、亡くなった者に対しては、その者の中に残された様々な思いや欲望を仏の力で鎮めて

もらい、それによって怨霊化することを防ぐとともに、故人が穏やかな境地へ導かれることを期待しているのである。

こうした神と仏に対する人々の関わり方は、あたかも自動車におけるアクセルとブレーキの役割に譬えることができるであろう。すなわち、人々は神に向かってエネルギーの適切な活用と、人間に対するエネルギーの適度な供給を期待する。それによって自然界と人間界の秩序が維持されることになるからである。しかし、仮に神々がエネルギーを暴発させると、それは自然界と人間界の秩序を乱す原因となる。それ故に、そうしたエネルギーの暴発に対して、ブレーキをかける役割を仏に期待しているのである。

アクセルのない自動車は動かない。しかし、ブレーキのない自動車はこの上なく危険である。その両者が揃ってこそ、はじめて自動車を正常な形で運転することが可能になる。それと同様に、現代の日本人は神から必要なエネルギーを取り入れ、過剰なエネルギーが発生した時にはそれを仏の力で鎮めてもらう。いわば、アクセルとしての神と、ブレーキとしての仏をほどよく使い分けることによつ

て、穏やかな日常生活を手に入れようとしているのではないだろうか。そのように考えれば、神と仏の双方に手を合わせている現代の日本人は、「宗教」に対していい加減な態度をとっているところか、極めて合理的な形で、神仏に對する信仰を保っていると言いうことができる。私は考えるのである。

注

- (1) 拙稿「現代日本における「宗教」の意味」『愛知学院大文学部紀要』四四(二〇一五、印刷中)。
- (2) 佐藤弘夫『神・仏・王権の中世』(法藏館、一九九八)三四八―三七六頁。
- (3) 愛知学院大学禅研究所主催の研究会における尾崎正善氏の発表「禅宗儀礼の研究―儀礼の変遷過程とその背景―」(二〇一三年五月二九日)による。
- (4) 島田裕巳『神も仏も大好きな日本人』(ちくま新書、二〇一一)一八四―一八九頁。
- (5) ただし、この時、江戸時代以来の檀家制度によって一応の経済的な基盤を維持し続けていた仏教界とは異なり、多くの神社は信徒達による安定的な経済基盤を持たないばかりか、政治権力による後ろ盾も失った。加えて、政教分離を旨

現代日本人の神仏観(木村)

とし、人々が個人の幸福を追求するようになった戦後の社会においては、皇祖神への崇敬も人々を神社に向かわせる有効な動機づけとはなり得なくなつた。さりとて、各地の神社では、その祭神を皇祖神から、明治時代に切り捨てられた雑多な神々に戻すこともできない。その結果、それぞれの神社の祭神が注目されることはなくなり、ほとんどの神社は単に「神さま」を祀る場所として人々の参詣を迎える場となつた。この状況は、例えば靖国神社と同様に戦没者を祀る各地の護国神社でさえも例外ではない。初詣のみならず、七五三参りや自家用車のお祓いまでも護国神社が受け入れているさまは、雑多な民間神や土地神を祀る神社と、何の区別もなくなつていると言わざるを得ない。つまり、伊勢神宮等の一部の例外を除き、たいていの神社と、そこに祀られている「神」は、それぞれの固有の性質を失つていたのである。

(6) ここでは、わが国の歴史の中で「神」として祀られてきたすべての存在を扱うわけではない。あくまで、現代の日本人の感覚にもとづきながら、一般的に「神」として認められる存在のみを対象とする。

(7) 原実『古典インドの苦行』(春秋社、一九七九)によれば、苦行はそれ以外にも、様々な罪や穢れを滅除し、浄化する機能を有するとみなされてきた。また、あらゆる願望をことごとく実現させるという神秘的な力をもたらずとも考えられていた。しかし、そこで願われる願望は、しばしば世俗的

現代日本人の神仏観（木村）

なものであった。それ故、苦行によって「解脱、涅槃等の宗教的理想を追う事はむしろ例外的事例に属した」（四二〇頁）とのことである。

(8) この点、並びに後述する怨霊の問題をめぐっては、義江彰夫『神仏習合』（岩波新書、一九九六）を参考にした。

(9) 日本の仏教史を通覧するのであれば、ここで平安時代後半に盛んになった浄土教思想にも言及する必要があるであろう。しかし、阿弥陀如来の力で極楽浄土へ往生することを願うこの思想は、最終的には極楽浄土において自らが修行を行い、自らの欲望等を放棄することを目指すものである。したがって、それは他者を鎮める「仏」ではなく、自らを鎮める「仏」に関わるものである。それ故、ここではあえて言及を控えることにした。

(10) この点については拙稿「禅と密教のあいだ―道元の立場から―」（『宗学研究』四七（二〇〇五）二一五―二二〇頁を参照されたい）。

(11) 西山美香「儀礼からみる〈死〉の思想―禅宗の場合―」（『東洋における死の思想』（吉原浩人編、春秋社、二〇〇六）一八九―二〇二頁を参考にした）。

(12) 佐藤弘夫『ヒトガミ信仰の系譜』（岩田書院、二〇一一）二〇四頁。